

『万葉集』における「大津皇子物語」

—二つの「竊」をめぐる—

柳 本 紗 由 美

—はじめに

—個々のテキストにおける「大津皇子物語」—

百伝ふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ

(3・四一六)

「大津皇子、死を被りし時に、磐余の池の堤にして涙を流して作らず歌一首」。この歌を詠み、大津皇子は二十四歳の若さで亡くなった。

『万葉集』には大津皇子の歌四首と、それに関わる歌八首が収載されているが、中でも巻二には一〇首の大津皇子関連歌が配列されており、二つの歌群が形成されている。

これまでの研究では、この二つの歌群を統合的に捉え、そこに物語性を見出した伊藤博氏の論を筆頭に数多の論が展開されてき

たが、既に駒木敏氏が指摘しているように⁽²⁾、その一つの結末は、都倉義孝氏が「大津の歌は全て仮託で、彼の歌は万葉人の幻想の中に生まれた」ものと捉え、「大津の詩と歌を万葉の文芸享受の中に置いて、大津皇子歌群とも称すべきものの存在とその享受」を想定しつつ、仮託説を論じたことであるといえよう⁽³⁾。一方、品田悦一氏は仮託説を否定するものの、これらの歌群が物語的に編纂されていることは認めている⁽⁴⁾。現在のところ、大津皇子歌群が仮託であるか否かには両論あるが、その歌群が「物語的に編纂」されていることは多く認められてきたと見做してよからう。

そして、その物語性の把握については、「若くして刑死したと・姉大伯皇女との情愛こまやかな関係・石川郎女との情熱的な歌のやりとりなど、いずれをとっても、大津は悲劇の主人公としての魅力に満ちている」と述べる都倉氏をはじめ、大津皇子を「悲

劇の主人公」として捉えている論が主流である。そしてその「悲劇」の質については、『万葉集』の背後に「大津皇子物語」とでも言うべき悲劇の物語を想定した都倉氏が、『懐風藻』の伝が伝える大津皇子像と記紀に伝えるヤマトタケル像とを重ねた上で『万葉集』の大津皇子歌群の解釈に参与させるなど、テキスト横断的に論を展開している例に顕著であるように複数のテキストを統合させて論じられることも少なくない。

しかし、個別のテキストを超えて、『懐風藻』、『日本書紀』、『万葉集』それぞれに語られる大津皇子像、そしてその「物語」と「悲劇性」を一つに統合することは本当に可能なのだろうか。大津皇子が刑死するという点は共通するものの、個別のテキストにはそれぞれ文脈が存する。

具体的に示そう。『懐風藻』と『日本書紀』とを比較するだけでもそこに現れる「物語」・「悲劇性」には大きな質的相異が見られる。『日本書紀』が語る大津皇子の謀反の記事には「為皇子大津所誣誤（皇子大津が為に誣誤かれたる）」という記述がある（朱鳥元年・一〇月二日条⁵）。この「誣誤」の語は、同年十月二十九日の詔においても「皇子大津謀反。誣誤吏民帳内不得已（皇子大津、謀反せむとす。誣誤かれたる吏民・帳内は已むこと得ず）」と繰り返される。「誣誤」とは『史記』孝文本紀三年条にも「濟北王背徳反上、

誣誤吏民、為大逆（濟北王、徳に背き上に反し、吏民を誣誤して大逆を為す）」と使われるように⁶、「人を欺いて惑わす」意である。大津は謀反を企てた首謀者であり、周囲の人々を欺き惑わせた張本人だと『日本書紀』は位置付けている⁷。

一方、『懐風藻』においても大津皇子の謀反に関して「誣誤」の語が用いられるのだが、その使用法は『日本書紀』とは正反対である。『懐風藻』は、「迷此誣誤。遂圖不軌（此の誣誤に迷ひ、遂に不軌を図らず）」と記述することで、謀反については大津皇子が自ら企てたのではなく、欺かれて起こし、その結果として自決に追い込まれたものとして語る。加えて、『懐風藻』の大津皇子が正史に反して天武天皇の第一子とされることにも注目したい。正史では第三子であるため、第一子という記述は作られたものであるといえる。この記述は、大津皇子を第一子であるにも拘わらず皇太子の地位に就けなかつた皇子として位置付ける機能をもつと考えられ、その点でも「悲劇の皇子」としての大津皇子像を形象しているのである。同じ謀反であっても、自ら起こそうとしたのか、誰かに欺かれて起こしたのかで、大津皇子の姿は変わってくるのではないだろうか。

『日本書紀』の大津皇子薨伝（持統紀・朱鳥元年一〇月三日条⁸）も、『懐風藻』の伝も、ともに大津皇子が才智に溢れた優れた人物

であったことに触れていることは周知のことである。しかし、「註誤」の主体・客体の逆転は、一方を才智あるが故に皇権に叛いてしまった者として、他方を才智故に謀叛の首謀者に担ぎ上げられてしまった者として、それぞれ位置づけることになる。このように「註誤」の用いられ方ひとつを較べてみても、『日本書紀』の語る大津皇子の「物語」と『懐風藻』のそれとは、大きく異なっている。

こうした「物語」の相違は必然的にそこに描かれる「悲劇性」の差異を生み出すこととなる。

『日本書紀』の大津皇子は、厳然と謀反の首謀者として形象されている一方で、残された妃山辺皇女やそれを見る者の悲しむ姿が「妃皇女山辺、被髮かみをかきたし徒跣すあしにして、奔赴はしりゆきて殉ともにかまる。見る者皆歎すすりな歎なく」と記述されることによって、その「悲劇」が語られる。ここでは、あくまでも大津皇子に対して感情移入しない位置取りで「悲劇性」は形象される。

他方、『懐風藻』の大津皇子は、欺かれて謀反を起こし、天武天皇の第一子にも拘わらず天皇の地位に立つことが出来なかつた皇子であり、更には同書の河島皇子伝に「始め大津皇子と、莫逆の契を為しつ。津の逆を謀るに及びて、島則ち変を告ぐ」と語られるように、莫逆の契を交わした河島皇子にまでも裏切られてしま

う悲劇の皇子である。大津皇子はその優れた才を周囲の者によって潰されてしまったことで自らが「悲劇性」を纏う存在となる。

このように、『日本書紀』・『懐風藻』それぞれのテキストによって、大津皇子の「物語」とその「悲劇」の質は異なっている。そして、そうであるとすれば、『万葉集』というテキストにおいてもまた同様に固有の「物語」を見ることが可能であろう。『万葉集』における大津皇子像、さらにはその悲劇の質はいかなるものであったのか、という点が問われなければならない。

では、『万葉集』の中で大津皇子の「物語」はどのように造形されているのだろうか。『万葉集』には「謀反」という言葉は出てこない。その代わりに、石川郎女との恋愛が大津皇子の死と関係しているかのように、歌が並べられ、題詞・下注が付されているのである。以下、『懐風藻』・『日本書紀』とは異なる『万葉集』における「物語」の文脈、およびそこから生まれる大津皇子物語における「悲劇」の質を考えてゆくこととしたい。

二 一〇五・一〇九番歌題詞「竊」をめぐる

『万葉集』の大津皇子関連の歌は、以下に掲出する姉大伯皇女の歌（A①②・B⑦⑧⑩）および大津皇子の恋に関わる歌（A③④⑥）が巻二に収載されている。また、巻三・巻八にはそれぞれ単

独で載せられる大津皇子の歌がある。『万葉集』における大津皇子の「物語」について考えていくにあたり、本稿では『万葉集』に連続して収載されるもの、即ち歌群と見做しうるA・B歌群の一首を考察の対象とし、特に「物語」の文脈を読み解くためにA歌群に比重を置いて論ずることとする。

〔A歌群〕

大津皇子、竊かに伊勢神宮に下りて上り来る時に、
大伯皇女の作らず歌二首

① 我が背子を大和へ遣るとさ夜ふけて晝露に我が立ち濡れし
(2・105)

② 二人行けど行き過ぎ難き秋山をいかにか君がひとり越ゆらむ
(2・106)

③ あしひきの山のしづくに妹待つと我立ち濡れぬ山のしづくに
(2・107)

④ 石川郎女が和へ奉る歌一首

④ 我を待つと君が濡れけむあしひきの山のしづくにならましものを
(2・108)

大津皇子、竊かに石川女郎に婚ふ時に、津守連通が
その事を占へ露はすに、皇子の作らず歌一首

未詳

⑤ 大船の津守が占に告らむとはまさしに知りて我が二人寝し
(2・109)

⑥ 日並皇子尊、石川女郎に贈り賜ふ御歌一首女郎、字を大名児といふ

⑥ 大名児を彼方野辺に刈る草の束の間も我忘れめや
(2・110)

〔B歌群〕

大津皇子の薨せし後に、大伯皇女、伊勢の齋宮より京に上る時に作らず歌二首

⑦ 神風の伊勢の国にもあましをなにか来けむ君もあらずに
(2・163)

⑧ 見まく欲り我がする君もあらずになにか来けむ馬疲るるに
(2・164)

⑨ 大津皇子の屍を葛城の二上山に移し葬る時に、大伯皇女の哀傷して作らず歌一首

⑨ うつそみの人なる我や明日よりは二上山を弟と我が見む
(2・165)

⑩ 磯の上に生ふる馬酔木を手折らめど見すべき君がありといわなくに
(2・166)

A歌群(①〜⑥)は、連続して配列されることによって、これ

らがひと纏まりをなすことは明らかだが、A歌群は内容的に更に二つの歌群に分けることができる。即ち、姉大伯皇女の歌二首(①②・A1歌群)と、大津皇子と石川郎女との恋愛をめぐる歌四首(③④⑤⑥・A2歌群)である。このようにA歌群を二つに分けて気がつくのは、その両歌群ともに題詞に「竊」字を持つという点である。

① 題詞 大津皇子竊_下於伊勢神宮、上來時、大伯皇女御作歌二首

⑤ 題詞 大津皇子竊_下婚_二石川郎女_一時、津守連通占_二露其事_一、皇子御作歌一首〔未詳〕

万葉歌四五〇首余りの中で題詞・左注に用いられた「竊」は七例で、そのうち二例がこの六首からなるA歌群に集中している。このように見ると、このA1・A2の二つの歌群において「竊」がどのように働いているのかを確認することは当該歌群把握のためのひとつの手掛かりとなろう。

都倉義孝氏は①題詞「竊」について、これ以外の六例の「竊」が「いずれもが男女の密通の意に用いられて」いることを指摘し、「したがって、万葉人がこの姉弟の間にそうした近親相姦の関係を想像していた」と見る。確かに当該の①題詞以外の用例は全て密通の例ではある。しかし、そのことが直ちに当該歌にまでも密通を想像させることになるだろうか。

「竊」字は動詞としては『周禮正義』『地官、山虞』の「凡竊木者、有_二刑罰_一」の鄭玄注に「竊、盜也」とあるように「盗む」にあたり、また副詞としては『広雅』『釈詁四』に「竊、私也」とあるように「_{ひそかに}」の意を表す。つまり、「竊」一字では必ずしも密通を意味するとはいえないのだ。そこで、個々の文脈の中での「竊」字の用例を確認することしよう。当該のA①⑤題詞の他に題詞・左注に「竊」字が使われるものは以下の通りである。

(1) 但馬皇女在_二高市皇子宮_一時、竊_接穂積皇子、事既形而御作歌一首 (2・一一六題詞)

(2) 昔者有_二壯士與_二美女_一也〔姓名未詳〕不_レ告_二親_一竊_レ為_二交_一接_二…(以下略) (16・三八〇三題詞)

(3) (前略)…木梨輕皇子為_二太子_一。容姿佳麗。見者自感。同母妹輕太娘皇女亦艶妙云々。遂竊_レ通。…(以下略) (2・九〇左注)

(4) (前略)…紀皇女竊_レ嫁_二高安王_一被_レ噴之時、御_レ作此歌。…(以下略) (12・三〇九八左注)

(5) 右、傳云、時有_二女子_一。不知_二父母_一、竊_接壯士也。…(以下略) (16・三八〇六左注)

確かにこれら五例の題詞・左注に使われる「竊」字は、いずれも男女の密通を語る文脈の中で用いられていることが確認できるの

であるが、「竊」一字に姦通・密通の意味が見出せぬ以上、それらの用例をより詳しく確認する必要がある。

そこで、題詞・左注における「竊」字に続く字に注目してみれば、A①「竊下」に対して、その他はA⑤「竊婚」・(1)「竊接」・(2)「竊為交接」・(3)「竊通」・(4)「竊嫁」・(5)「竊接」である。「竊」に下接するそれぞれの文字の文脈上の意を示せば、A①「下」は「くだる」、A⑤「婚」は「よめとり」、(1)・(2)・(5)「接・交接」は「(男女が)まじはる・あふ」、(3)「通」は「まじはる・密かに情好をまじへる」、(4)「嫁」は「とつぐ」となる。¹⁰⁾右に見るように、A⑤及び(1)・(5)に見える「婚・接・通・嫁」字には男女の関係を表す意があるが、当該歌の題詞に見られる「下」字には男女の関係を示す意がない。このことから明かになるのは、「竊」字そのものに密通の意があるのではなく、「竊」字に男女の関係をあらわす語が下接してはじめて密通の意味が生じるということである。よって①歌題詞「竊」は、密通や近親相姦が行われたことに対しての「竊」ではないということになる。その一方で、⑤歌の「竊」字は男女の関係を意味する「婚」字が下接することから、この二字をあわせて密通や姦通の意味を表わしているものだと考えてよい。

では、なぜA①題詞では「竊」字が使われたのか。「竊」かに「下」

る先は大伯皇女のいる「伊勢斎宮」と記されるのではなく、明確に「伊勢神宮」と記されている。¹¹⁾周知のように伊勢神宮は、天皇権力を保証する皇祖神であるアマテラスが祀られる聖地であった。皇祖神を無断で祀ることは禁忌とされる。岡田精司氏は伊勢神宮の神威が皇位と直結することを述べ、それ故に「伊勢神宮への奉幣祈願の資格を天皇・皇后と正式な皇位継承者のみに限定」する私幣禁断の制があることを説いた上で、大津皇子が皇位継承を望む祈願のために天皇権力の根源たる伊勢神宮へ、天皇あるいは公には「竊」に下つたのだと論じている。¹²⁾下つた先が「斎宮」ではなく「神宮」であることもあわせて考えれば、岡田氏の指摘は一定の説得力を持つ。

確かに、そのように見ると大津皇子は『日本書紀』や『懷風藻』が示すような謀反を起こす人物としてイメージされることとなる。だが、これらを総合して「歴史的事実」という名の物語を紡ぎ出すことは、テクストの個別性に頓着せぬ物言いとなつてしまおう。『万葉集』においては、その歌表現や題詞・注において大津皇子の政治的な謀反は一切語っていないからだ。『万葉集』が提出する「物語」には、大津皇子が政治的な意味で皇位継承を望む姿は描かれていない。そうでありながら、岡田氏の説くように天皇としての力(伊勢神宮の神威)を欲していると読むことができるのだ。

個別のテクストとして『万葉集』を論じるに際してはこの点にこそ注意しなければなるまい。

すなわち、A歌群においては、前半①②歌に謀反につながる私幣を想起させるような「竊」なる伊勢下向を語りながらも、続く③④歌群では、謀叛を起こすのではなく石川郎女との「竊」なる恋を語るのである。まさにこの点で、『日本書紀』『懷風藻』とは大いに異なるのである。ではその「竊」なる恋とはいかなるものであつたのだろうか。

三 「妹を待つ」男とその事情

——一〇七〜一〇番歌の表現——

右に述べた問題を承けて、本節では題詞に「竊」字を用いる⑤歌を含む大津皇子の「竊」なる恋愛事情が窺えるA2歌群(③④⑥歌)の歌の表現と題詞が創り出す一連の「物語」の文脈を辿つてみよう。

まず、大津皇子が石川郎女に贈つた③歌である。「妹待つ」という表現について、『釋注』は、古代において恋人を待つことは女の行為であつたことから、男が女を待つことが普通のことではないと、その行為の異常さを述べている。近年の『新大系』においても同様の見解が示された上で「皇子と郎女の間の特異な事情を

窺わせる」との指摘が加えられている。これらの指摘の如く、古代の通い婚では

(6) 我が背子を今か今かと待ち居るに夜の更けゆけば嘆きつ
るかも (12・二八六四)

(7) 我が背子は 待てど来まらず 雁が音も 響みて寒し
: (13・三二八二)

などのように、女が「背子(≡男)」を待つのが一般的であつた。しかし、③歌では男である大津皇子が女の石川郎女を待つ。『万葉集』中の「待つ」の用例は二八〇首・三〇〇例を数えるが、男が「妹(≡女)」を待つ歌は当該歌の他には三例を見るのみである。¹³⁾

この異常さは、③歌が「妹を待つ」だけでなく「山で待つ」という状況を歌っていることも符合する。『窪田評釈』は、男女がひそかに逢うには人目に付かない山や野が選ばれることが一般的であつたと言及している。山や野で男女が逢うことを特別なことではなかつたとするのは古来の習俗等を踏まえての発言であろうが、しかし『万葉集』において「山で待つ」ことを歌う例は当該歌の他に存在しない。つまり、「山」で男が女を待つという男女の恋愛は、歌表現のレベルでは甚だ特殊であり、そこからは『万葉集』中の人目を避ける恋一般に比して、余程強い障壁があることが了解されるのである。

対する石川郎女の返歌(④歌)では、その障碍の大きさを物語るが如く、彼女が約束の場所に来たいと切望しつつも来られなかったことが歌われる。④歌は③歌で大津皇子を濡らした「あしひきの山のしづく」をそのままに承けて「あしひきの山のしづくにならましものを」と歌う。「ならましものを」の類型句は、

(8) かくばかり恋ひつつあらずは石木にもならましものを物思はずして (4・七二二)

(9) 世の中は恋繁しそやかくしあらば梅の花にもならましものを (5・八一九)

のように、恋心に苦しむよりは、いつそのこと「石木(8)」や「梅の花(9)」のように恋心を抱くことのないものになって恋の辛さから逃れてしまいたいと願うもの⁽¹⁴⁾、及び、

(10) 後れ居て恋ひば苦しも朝獺の君が弓にもならましものを (14・三五六八)

(11) 後れ居て長恋せずは御園生の梅の花にもならましものを (5・八六四)

のように恋心に苦しむくらいならば、いつそのこと相手の所有物(「君が弓(10)」や「御園生の梅(11)」)になって恋人と一緒にいることを希求するものがある。④歌は勿論、後者と通じ合う。しかし石川郎女がなりたいたいと願ったのは、大津皇子の所持品ではな

かった。「山のしづく」は大津皇子を苦しめるものであり、また、いずれは乾いて儂くも消えてしまうものである。恒久的に大津皇子と時間を共にすることはできない。④歌は、そのようなものでも「ならましものを」と願う。それは「山のしづく」が「我を待つと君が濡れけむ」と修飾されているように、「我」を待っていてくれたことの証しのものであったからだ。(8)(9)のように恋心を捨て去るのでもなく、(10)(11)のように安定して恋人に寄り添うのでもない。これらの類歌に照らしてみれば、そこから逸脱する④歌には、相手を希求する強い思いが溢れていることが看取されよう。それ故に、③④歌の贈答の時点で、ここには二人を妨げる強い障碍があることが読み取れるのである。

その障碍とは何であったのか。それは⑤⑥歌とその題詞・下注から把握できる仕組みになっている。歌と題詞が創り出す物語によれば、日を改めて二人は逢い、情を通じることがなかったのである。ただし既に述べたように、⑤歌の題詞の「竊婚」が示す通り、大津皇子と石川郎女は結ばれてはいけない関係なのだ。『万葉集』の創り出す「物語」は、その次に配列された⑥歌と題詞によって「竊」なる恋の由縁の謎解きを用意している。

⑥歌では、「日並皇子尊」が「大名児」という女性を束の間も忘れることはない、「大名児」に対する恋心が歌われる。歌そのも

のからは「大名児」とは誰なのかは見えない。しかし、その題詞の下注「女郎、字を大名児といふ」によつて⑥歌中の「大名児」と題詞の「石川女郎（石川郎女）」とが同一人物として結ばれる。これによつて⑥歌は、「日並皇子尊」すなわち皇太子草壁皇子が石川郎女に贈つた恋歌だと読めることになる。つまり、大津皇子は次期天皇の想い人と情を通じたのである。ここで、大津皇子と石川女郎との間にあつた障碍が何であつたかが明らかとなる。

采女制度が物語るように、古代の天皇は各地方の土地を代表する女性——各地方の土地の神と繋がる女性——と通ずること（¹⁶）間接的にその土地の神を従え、信仰的に日本を支配しようとした。天皇が女性と通じることが、天皇権力の基盤を信仰的に支えるものであり、天皇が恋の対象とする女性と通じることが、天皇権力に対する犯しとなる。折口信夫の言うところの天皇の「いろごのみ」に対する犯しである。

⑥題詞では草壁皇子が「日並皇子」と記されるが、これは日（天皇）に並ぶ皇子命の意であり、天武皇統の系譜意識が特に強く反映された呼称である。このこともあわせて、大津皇子の恋がまさに「いろごのみ」という天皇の徳に対する犯しであるのだと物語られていると見てよいだろう。だからこそ、徹底的に「人目」「人言」を避ける表現、集中唯一の「山で妹を待つ」という表現がA

③④歌の贈答で歌われているのである。

松田浩氏は万葉歌の恋愛における障碍の典型を「人言」に求め、歌語としての「人言」を、「天皇の独占する女性に対するタブーを犯す行為を抑圧する、聖朝のどこからともなく湧き上がる王徳の言葉」と述べる。¹⁷当該歌群には「人言」や「人目」という言葉こそないが、「山での逢瀬」や「妹を待つ」といった異常なまでに秘められた逢瀬の表現を考慮すれば、参考となる指摘であろう。大津皇子・石川女郎は「人目」「人言」による露見を恐れたのである。

③④歌では、「天皇権力」という大きな障碍があつたために石川郎女は大津皇子に逢いに行くことが出来ず、大津皇子も人目を避けた山で待つことしか出来なかつたのである。「妹待つと」から始まる③④歌四首は、次期天皇の想い人である石川郎女との、決して露見してはいけない恋愛、次期天皇「日並皇子」の「いろごのみ」の徳に対する大津皇子の（謀反）ともいえる恋愛を物語っている歌群なのである。

四 「まさしに知りて」犯した罪

——二つの「竊」の結節点——

如上のことを確認した上で、その露見に際しての大津皇子の歌、⑤歌を万葉集の「物語」の中に位置づけてみよう。⑤歌題詞によ

れば、「竊」なる二人の關係は津守連通によつて露見してしまふ。

「津守が占に告らむ」ことを「まさしに知りて」と歌うことからは、石川郎女との密通が占によつて露見することを大津皇子は承知していたということになる。これについて、山崎馨氏は、石川郎女との恋愛の発覚が「大津皇子の立場を一段と不利にしたはずであるが、この歌には少しも悪びれたところがない」（傍線は引用者による）と述べる。また、『釋注』は、「すこぶる強気な歌」と述べており、⑤歌における大津皇子の開き直りともいえる姿に注目している。この開き直りの姿は「津守が占」・「まさしに知りて」の表現から窺えよう。「津守が占」の「が」については諸注釈書も言及しているように、「人名についた格助詞方はノに比べて軽視・憎悪などの気持ちを表す（『新編全集』）」ものであると考えられている。

こうした表現によつて、⑤歌を「性頗る放蕩にして、法度に拘れず」という『懷風藻』の大津皇子の性格によく合っている歌だとする注釈書は多い。しかし『万葉集』の外部のテクストにおける大津皇子の性格描写をここにスライドさせれば事足りるというものでもない。『万葉集』だけが持つ固有の文脈における「物語」と、そこから浮かび上がる大津皇子像を捉えてみよう。

『万葉集』における大津皇子の恋愛は、前節でも考察した通り、

次期天皇の想い人との恋愛―「いろごのみ」という天皇権力と対立する恋愛―である。天皇の恋する女性を奪うことは、例えば仁徳天皇の想い人である女鳥王を奪つた速總別王がそうであったように、時に死をも意味する行為となる。それでいながら、⑤歌の「まさしに知りて我が二人寝し」の表現からは、天皇権力への反逆に対する迷いは一分も感じられない。『万葉集』における大津皇子は、この恋愛が天皇の「いろごのみ」に対する（謀叛）であることを承知の上で、それでも石川郎女と情を通じることが自ら選んだのである。このような命を賭して恋に生きる決意に照らしてみると、①題詞の「竊下伊勢神宮」で仄めかされる私幣禁制への犯しが何を求めてのものであったのかという問題との結節点もまた、「物語」の中で見えてくることとなる。

右のことを念頭に置きながら、大津皇子の恋歌A2歌群の直前に配置され、題詞に「竊かに伊勢神宮に下」つたところが語られた上で収載される大伯皇女の歌①②（A1歌群）の表現を捉えかえしてみよう。大伯皇女が『日本書紀』『懷風藻』におけるそれぞれの「大津皇子物語」に参加していないことに鑑みれば、『万葉集』の「物語」を捉える上でこの配列は看過できない。A1の題詞「竊下伊勢神宮」が『万葉集』の「物語」に果たす機能は既に見てきた通りであるが、A1の大伯皇女の歌①②そのものの表現は、「物語」を紡

ぎ出す歌群の中でどのような役割を担っているのでしょうか。

①歌の「遣る」という語は「行かせる」という意であるが、『万葉集』の中では、

(12) 我が背子を大和へ遣りてまつしだす足柄山の杉の木の間か

(14・三三六三)

(13) 我が背なを筑紫は遣りて愛しみ結は解かなあやにかも寝

む

(20・四四二八)

のように、「手離したくないのに行かせる」の意で詠まれることが多い。²⁰⁾さらに、「曉露に我が立ち濡れし」と、弟が帰って行くの外で着物が濡れてしまうほど長い間立ち尽くしていたことが表現される。②歌の「秋山」は『万葉集』中に十七首詠まれ、その内三首は挽歌の類に存している。

(14) 秋山の黄葉を茂み惑ひぬる妹を求めむ山道知らずも

(2・二〇八)

(15) 秋山の黄葉あはれとらぶれて入りにし妹は待てど来まさ

ず

(7・一四〇九)

(14) 歌では、「妹」の死を「秋山」に惑ってしまったと表現し、また(15) 歌でも同様に「妹」の死を「秋山」に入ってしまったと歌う。この二首は冥界や死者が行く場所として秋山を詠んでおり、西郷信綱氏が②歌を「死のイメージを暗示するもの」と述べ

ているように²¹⁾「秋山」は姉弟を分かつ山でありつつ、そこには生死の境界のイメージが伴う。②歌にはこのような「死」をイメージさせる「秋山」―生と死の世界の境界―を「ひとり越」えて大和へ帰って行く弟をいつまでも見送る大伯皇女が想起される。「遣る(①)」「という言葉と死のイメージを纏う「秋山(②)」という言葉が並ぶことから、既に弟の死を予期していた、けれどもそれを止めるすべのない大伯皇女の姿が思い浮かべられる。そこに弟の死を感じ取りながらも見送るほかに何も出来ない姉の悲しみを読みとることも許されよう。

つまり、①②歌の表現からは、既に大津皇子は死を覚悟していたのであって、その決意を姉大伯皇女が心得ていたのだということが了解されるのだ。①題詞「竊」によって大津皇子の(謀叛)の意思は既に予期されていること、および既に見てきたようにその「物語」の展開が次期天皇「日並皇子」の想い人を我がものとする恋へと続くことを考え合わせれば、①②の歌から見出される大津皇子の「死の覚悟」とは、石川郎女との恋が天皇の「いろいろのみ」を犯すという禁忌であり、それが(謀叛)となるのだということを充分に納得した上で、それでも命を賭して恋を成就させようとする固い決意であろう。

そして『万葉集』が提示するような「物語」の中では、こ

の「死の覚悟」こそが⑤歌の「まさしに知りて我が二人寝し」を説明しえよう。この「開き直り」・「すこぶる強気」なる思いの表出は、命を賭しての恋であればこそものだ。自らの恋が王者の「いろこのみ」に対する犯しであると知っていながら、それほどまで一途に恋の思いを成し遂げたことが「開き直り」の表現を可能とするのであった。「放蕩」や「法度に拘われず」といった「懷風藻」の伝の大津皇子像をここに読み込む必然性はない。

『万葉集』の「物語」における大津皇子は、次期天皇の恋人を奪うことを可能にする天皇の徳たる「いろこのみ」の力を得るために、公に秘して「竊」に伊勢神宮に下るといふ禁忌を犯した皇子であり、そしてその上で「日並皇子」の想い人である石川郎女と「竊」に情を通じたのだ、と読むことができよう。「禁じられた恋」ゆえに天皇権力に抗う謀叛人となることを選んだ皇子として描かれる。大津皇子が命をも辞さない恋をしたという点に、『万葉集』の語る「悲劇性」を見出すことができるのである。

なお、その「悲劇性」に関しては一言を必要とする。それは、既に見たように①②において大伯皇女の悲しみが非常に強く表出されているということ、および『万葉集』巻二を一つのテキストとして読み進めて行く中で、大津皇子を偲ぶ大伯皇女の挽歌、B歌群が現れるという点についてである。B歌群については詳述す

る紙幅はないが、その歌群の綴じ目である⑨⑩歌については確認をしておきたい。

⑨歌の「うつそみの人」という表現は、「この世の人」^⑩、つまり、死んでしまった大津皇子とは対照的に生きている大伯皇女自らのことを指して詠み、そのような「我」が「二上山を弟と我が見む」と心を決める。題詞は、二上山には大津皇子が葬られたことを語っており、まさに大伯皇女にとつて二上山はただの山ではなく、「うつそみの人」として感受しうる弟そのものであった。

⑩歌では、⑨歌でそうした決意を示したものの「見すべき君」のために馬酔木の花の枝を手折ろうとしてしまう。馬酔木は「あしびなす榮し君（7・一一二八）」の例があるように、「栄ゆ」を導く枕詞にも使用される植物であり、「生命力の充実を象徴する植物」であった。^⑪見るタマフリによつて生命力を充実させるべき、「見すべき君」はもういない。しかし、それでも歌われる「手折らめど」の意思「む」―手折つて、そして見せよう、との思い―は、弟が既に冥界にあり、現世においては二上山を弟として見るほかはないと決意していたにも拘わらず、弟を「うつせみ」の如くに感じてしまった際の思いである。しかし、それはすぐさま「見すべき君がありと言はなくて」と打ち消される。人麻呂の泣血哀慟歌（2・二一〇）では「うつせみと 思ひし時に」ともに過ごし

た恋人を亡くした詠歌主体は、

…恋ふれども 逢ふよしをなみ 大鳥の 羽易の山に 我が
恋ふる 妹はいますと 人の言えは 岩根さくみて…

(2・210)

と、愛する者の存在を言ってくれる「人」のことがあり、そこに今一たびの邂逅への一縷の希望が託される。しかし、大伯皇女にはそうした言葉をかけてくれる人すらいない。弟に見せようと馬酔木を手折ろうとしてしまった後だけに「見すべき君がありと言はなくて」に表出された心情はあまりにも悲痛だ。

『万葉集』中に大伯皇女の歌は、大津皇子関連歌群の六首のほかには存せず、また、その歌の中のまなざしは常に大津皇子に向けられていたのである。

『万葉集』の大津皇子の「物語」における「悲劇性」は、天皇権力への〈謀叛〉とも言いうる一途な恋に命を落とす大津皇子が纏うのと同時に、姉大伯皇女の弟に対する情愛と哀惜に満ちた六首(①②・⑦⑩)によって、大津皇子に先立たれた者の視点からも立体的に描かれるのである。

五 終わりに

——『万葉集』における「大津皇子物語」——

如上に見てきた物語は、巻二における大津皇子歌群(①⑩)から読みとることのできる「物語」である。『万葉集』は各巻によって編纂方針が異なっており、巻一・二は、持統朝の皇室関連歌が中心に収載されている。その中で、大津皇子歌群がどのような位置を与えられているのかを考える必要がある。

巻一の巻頭歌(雑歌、冒頭歌でもある)は、「籠もよ み籠持ち」に始まる雄略天皇の御製歌である。まさに「いろごのみ」の王と呼ぶべき天皇の求婚の歌である。そして巻二の巻頭歌(相聞歌、冒頭歌)は、「聖帝」と称される仁徳天皇の皇后、磐姫皇后が一途に天皇を恋慕う歌群である。巻一では、土地々々を代表する全ての女性と恋することが、巻二では皇后に一途に愛されること、それぞれ天皇のあるべき姿なのだとする歌が巻頭に置かれていることに目を向けたい。つまり、巻一・二では天皇権力とその恋愛とを結びつけ、天皇の「いろごのみ」によって皇権に祝意と賛美を与えているのである。従って、大津皇子が天皇権力たる「いろごのみ」を犯す禁忌の恋によって反逆者となってしまうということが、『万葉集』における大津皇子の「物語」を語る上で注目す

べき点であり、そう読むことが、『万葉集』というテキストのあり方に寄り添うことになるのではないだろうか。

天皇のあるべき恋愛の姿を巻頭に据えながら、その権力に敗れ去った者に、そして敗れ去った者を愛おしみ、哀惜する者に「悲劇」の主人公の位置を与える。これが『万葉集』というテキストのあり方であったのではないだろうか。

『万葉集』では、大津皇子の政治的な「謀叛」を語る『日本書紀』『懷風藻』とは異なり、次期天皇「日並皇子」の想い人との許されぬ恋ゆえに天皇権力に抗う反逆者となったことが大津皇子の「悲劇性」として描き出されている。これに加え、姉大伯皇女の情愛を一身に受けながら亡くなった皇子であったという点にも「悲劇性」が見られるのであった。恋に生き、恋に死に、情愛に生かされた者の死として語られる——それが『万葉集』の描き出す大津皇子の「悲劇の皇子」像なのである。『日本書紀』『懷風藻』と『万葉集』、それぞれのテクストの中で大津皇子の物語には悲劇性が付与されるが、その「物語」の内容と「悲劇」の質とは、かくも異なっていたのである。

註 (1) 伊藤博 『万葉集相聞の世界』 塙書房・一九五九年

(2) 駒木敏 「構想的歌群のなかの恋」 『恋の万葉集』 高岡市万葉歴史

館論集11・笠間書院・二〇〇八年

(3) 都倉義孝 「大津皇子とその周辺」 『萬葉集講座 第五卷 作家と

作品Ⅰ』 久松潜一監修・有精堂・一九七三年

(4) 品田悦一 「大津皇子・大伯皇女の歌」 『セミナー万葉の歌人と作

品 第一巻 初期万葉の歌人たち』 神野志隆光・坂本信幸編・

和泉書院・一九九九年

(5) 『日本書紀』の本文は小学館新編日本古典文学全集2/4 『日本

書紀(1)』 (3) 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・

毛利正守校注(一九九四〜一九九八)による。以下の引用も同様。

(6) 『史記』の本文は中華書局版『史記』に拠った。(当該本文は第

二冊・四二六ページ)

(7) なお、持統紀に於いて大津皇子を「皇子大津」として「皇子十名前」で表記することについて、これを謀反を起こした者として敬称を省く記述だとする解釈が広く行われているが、その点は首肯できない。都倉氏は、持統紀撰善言司の条に「皇子子施基」の表記があることに触れて「支配者側の憎しみをそこに読みとるのは無理である」と述べる。なお附言すれば、持統紀においては「皇子施基」に限らず「皇子川嶋」「皇子高市」などの表記が貰かれており、これは『後漢書』顕宗孝明帝紀第二「皇子炬為」「皇太子」などの表記法によったものであろう(『新編全集』頭注)。そうした中で草壁皇子のみが唯一「草壁皇子尊」と表記されており、持統紀では草壁皇子を特権化するために、「皇子十名前」の諸皇子表記と「草壁皇子尊」とを書き分けたものと見るべきである。

(8) 「皇子大津は天渟中原瀛真人天皇の第三子なり。容止墻岸にして、音辞俊朗なり。天命開別天皇の為に愛まれたまふ。長に及びて

弁しく才学有しまし、尤も文筆を愛みたまふ。詩賦の興り、大津より始まり」とあり、持統紀では特に文筆の才能について称賛している。

(9) 本稿の冒頭に挙げた辞世歌(3・四一六)及び、巻八「秋雑歌」に収められる一首(8・一五二)。

(10) 便宜的に諸橋徹治『大漢和辞典(修訂版)』(大修館書店・一九八六年)の掲げる字義によって示した。

(11) この点、B歌群の題詞では大伯皇女が「伊勢齋宮より京に上る」とあって、大伯皇女の居所を明確に「伊勢齋宮」と記していることとの相違を見るべきであろう。

(12) 岡田精司「古代における伊勢神宮の性格—私幣禁断をめぐる—」『古代祭祀の史的研究』塙書房・一九九二年

(13) 当該歌「妹待つと我立ち濡れぬ」(3)の他には、「我れ立ち待つと妹に告げこそ」(11・二七七)、「かくだにも妹を待ちなむ」(11・二八二)、「妹待つ我れを」(12・三〇〇)の三首のみである。

(14) 提示したものの他、「なかなか人にとあらずは桑子にもならましものを玉の緒ばかり」(12・三〇八)がある。

(15) (11)の例(5・八六四)は、吉田宜が大伴旅人に贈ったもので正確には男女の恋歌とは言えない。しかし交友の表現として恋歌の表現を用いたものであるので、用例とし得るものと判断する。

(16) 折口信夫「国文学」『折口信夫全集』第十四巻・中央公論社・一九六六年

(17) 松田浩「万葉の「人言」——厄理願挽歌を起点として——」『日本文学』五六巻5号・二〇〇七年

(18) 山崎馨「大津皇子と大伯皇女」伊藤博・稲岡耕二編『万葉集を

学ぶ』第二集・有斐閣・一九七七年

(19) 例えば澤瀉久孝『萬葉集注釋』の当該歌に関する【考】でも「前(一〇五)に引用した大津皇子の御性格について語られた文章も(引用者注：『懐風藻』の伝の文章を指す)、この皇子の御作にみづから肯定してをられる感である。」とし、稲岡耕二『萬葉集全注』もまた、『懐風藻』の伝を引用した上で、「この歌に津守が占に」と侮りをこめて言い、「正しに知りて寝し」と昂然と言いつ放っているところは、そうした皇子の気性や、事件をめぐる津守連その他の人々の動きへの反撥も感じさせるようだ」と指摘する。

(20) この点、品田悦一「前掲論文に既に指摘がある。」

(21) 西郷信綱「大来皇女と大津皇子」『萬葉私記』未來社・一九七〇年

(22) 『時代別国語大辞典 上代編』「うつそみ」の項に「①この世の人、②現世」とある。ここは「うつそみの人」とあって後者の意となる。

(23) 多田一臣「第三期の和歌」多田一臣編『万葉集ハンドブック』三省堂・一九九九年

(付記) 本稿執筆にあたり、松田浩先生、月岡道晴先生より懇切丁寧なご指導を賜りました。ここに記して衷心より御礼申し上げます。次第です。

(二〇一一年 卒業)